

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：12501
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2017～2019
 課題番号：17K04606
 研究課題名(和文) 施設入所児・要支援家庭児に対する保育者の専門性向上のための研修プログラムの開発

研究課題名(英文) In-service training for ECEC teachers working with children at a child welfare institution and families to provide support

研究代表者
 砂上 史子(SUNAGAMI, Fumiko)
 千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：60333704
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：社会環境の急速かつ大きな変化に伴い、子どもをめぐる諸問題が深刻化するなか、質の高い保育・幼児教育の展開・充実は喫緊の課題である。そのため、保育者(幼稚園教諭・保育士)の専門性の高度化及びそのための保育者研修の充実が求められている。本研究では、貧困や虐待等により、児童福祉施設に入所する乳幼児(施設入所児)や専門的支援を要する家庭の乳幼児(要支援家庭児)に対する、保育者の専門性に焦点を当てた。具体的には、児童養護施設の幼児の幼稚園就園に関する実態調査を行った。また、心理教育的介入プログラムに根差した保育者の専門性向上のための研修プログラムを実施し、その効果を検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義は、2点ある。1点目は、従来十分に取り上げられてこなかった施設入所児・要支援家庭児に対する保育者の専門性に焦点を当てたことである。2点目は心理教育を保育者研修に導入し、保育・幼児教育と臨床心理学との接続を強化した点である。

本研究成果の社会的意義は2点ある。1点目は、施設入所児の幼稚園就園等の実態を明らかにしたことである。2点目は、施設入所児・要支援家庭児に対する保育者の専門性を高められる心理教育に根差した研修プログラムを開発したおことである。開発した研修プログラムは、施設入所児・要支援家庭児以外の多様な乳幼児に対する保育実践の充実にも寄与できると考えられる。

研究成果の概要(英文)：Children's various problems are exacerbated in the context of social change, rendering the development and provision of high-quality early childhood education and care (ECEC) more important during such times. Therefore, it is imperative that we establish in-service training programs for ECEC teachers. To this end, this study focused on training ECEC teachers working with children at a child welfare institution and families to provide support related to child abuse and poverty.

We distributed surveys regarding the characteristics and needs of kindergarten students receiving services at a child welfare institution. And we developed a psychologically sophisticated in-service training program to educate ECEC teachers.

研究分野：保育学

キーワード：保育・幼児教育 社会的養護 心理教育 研修 保育者の専門性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

質の高い保育・幼児教育の重要性は近年ますます認識され、その価値は個人的利益を超えた社会全般にとっての「公共財」(OECD “Starting Strong II”, 2006)である。質の高い保育・幼児教育は、成人期以降の生活にも持続的に影響する他者に対する信頼感や自己調整能力などのいわゆる非認知的能力を養い、その肯定的影響は貧困等の「リスクの高い」子どもにおいてより大きい。その質の高い保育・幼児教育を担保する最大の要因は保育者の質である。

現在の日本では、児童虐待や貧困などにより「リスクの高い」環境にある子どもが増えている。乳児院や児童養護施設等の社会的養護の下で暮らす子どもの数も増加傾向にある。かつ児童養護施設の入所児童の約半数以上は被虐待経験を有し、施設入所児童に占める障害児等の割合も増加している。さらに、「リスクの高い」状況の下、施設に入所せず地域の社会福祉、精神保健福祉等の支援を受けながら家庭で育つ乳幼児や、支援のニーズがありながらも専門機関につながらずにリスクを抱えた家庭で育つ乳幼児もあり、その数は施設入所児よりもかなり多いと考えられる。

平成27年度より本格実施の「子ども・子育て支援新制度」は、すべての乳幼児に質の高い幼児期の学校教育、保育を提供することを理念としており、乳児院・児童養護施設の乳幼児(以下「施設入所児」)や支援を要する家庭の幼児(以下「要支援家庭児」)も他の乳幼児と同様に、等しく質の高い幼児期の学校教育・保育を受ける権利を有している。施設入所児や要支援家庭児を幼稚園・保育所等で保育する場合、生育歴や家庭環境等をふまえ、一人一人の特性やニーズにより丁寧に対応する必要がある。

施設入所児や要支援家庭児の多くは被虐待経験や不適切な養育経験を有することから、愛着障害等の行動特性を示す乳幼児や、複雑な事情や問題を抱える保護者に対応する専門性が求められる。しかし、そのようは保育者の専門性は十分に体系化、明文化されておらず、保育現場の暗黙知の域を出ていない現状がある。また、関連の深い臨床心理学などの知見や心理教育的介入プログラムとの接続が弱いため、保育者の困難感が強かったり、適切な援助が十分に行えていなかったりする現状がある。

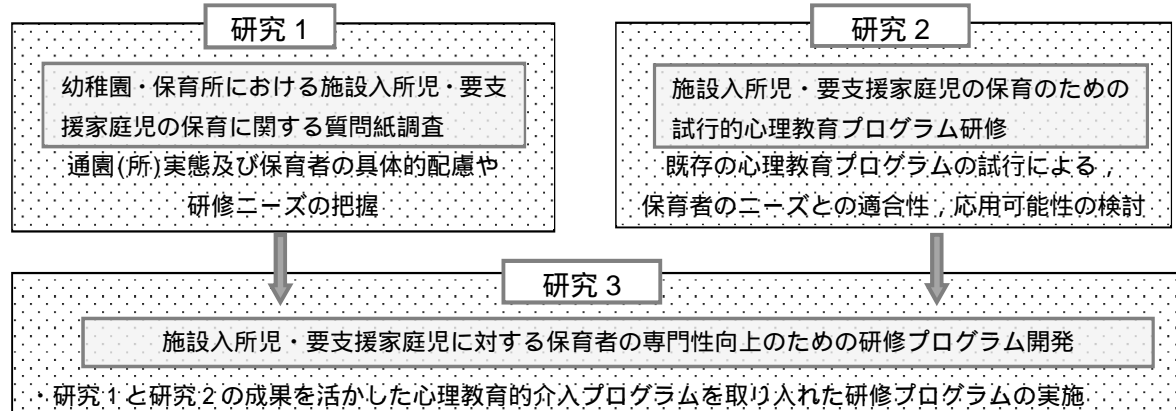
一部の幼稚園等では、施設入所児の対応に園が不安を抱き、入園を断る実態があり、施設入所児や要支援家庭児の幼児期の学校教育・保育を受ける権利が脅かされる事態も生じている。その一方で、国内外では、臨床心理学や精神医学を活かした、虐待を受けた子どもとその養育者・支援者に対する心理教育的介入プログラムが開発され、成果を挙げてきている。したがって、これらの心理教育的介入プログラムに根差した保育者の研修プログラムを開発することで、幼稚園・保育所等における施設入所児や要支援家庭児に対する専門性を向上させることにつながると考えられる。

2. 研究の目的

社会環境の急速かつ大きな変化に伴い、子どもをめぐる諸問題が深刻化するなか、質の高い保育・幼児教育の展開・充実が喫緊の課題である。そのため、保育者(幼稚園教諭・保育士)の専門性の高度化及びそのための保育者研修の充実が求められている。本研究では、貧困や虐待等により、児童福祉施設に入所する乳幼児(施設入所児)や福祉等の専門的支援を要する家庭の乳幼児(要支援家庭児)に対する、幼稚園・保育所等の保育者の専門性に焦点を当てる。具体的には、児童養護施設の幼児の幼稚園就園に関する実態調査と、心理教育的介入プログラムに根差した、幼稚園・保育所等の施設入所児・要支援家庭児に対する保育者の専門性向上のための研修プログラムを開発することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、2017年度から2019年度の3年間に、以下の研究1～研究3を実施した。なお本研究の研修プログラムでは、研究分担者の野坂が開発・研究・実践を行っている性被害を受けた子どもと支援者のための『My Step』と、研究分担者の福丸が研究・実践を行っている子どもと大人の絆を深める『CARE(Child-Adult Relationship Enhancement)』の内容を導入し実施した。



4. 研究成果

(1) 幼稚園・保育所における施設入所児・要支援家庭児の保育に関する実態調査(研究1)

目的: 児童養護施設で暮らす幼児の就園の実態や、それらの幼児に対する保育者の配慮等について明らかにする。

方法: 質問紙調査を実施した。調査実施時期は2017年8月で、調査対象はA県内全幼稚園・認定こども園613園であった。このうち、336園から回答を得た(回収率54.8%)

結果: 過去5年以内の児童養護施設で暮らす幼児の入園希望の有無は、「入園希望有り」が8.0%。「入園希望無し」が90.8%で、入園希望有りは全体の1割未満だった。施設幼児の入園希望のあった園は全体の1割未満と少なく、入園希望の有無は、児童養護施設のある地域などにより限られていると考えられる。

1) 施設入所児が入園した園の回答: 入園希望があった園のうち施設幼児が入園した27園の保育者の、施設幼児の特徴に関する項目の5段階評定の結果では、「基本的生活習慣が身に付いている」(3.63)、「大人を信頼している」(3.38)などの発達上望ましい姿の一方で、情緒的に不安定な特徴や「大人にかまってもらいたがる」(4.59)など、配慮が必要な姿が捉えられていた。

施設幼児の保育における配慮・工夫(図1)では「甘えを受け止め1対1のかかわりを多くする」(21回答, 77.8%)、「児童養護施設の職員と緊密な連携を図る」(20回答, 74.1%)など個別的、受容的、共感的な関わりとともに、施設職員や園の職員同士の連携による対応を図っていることが明らかになった。また、自由記述の回答から、施設幼児の保育における課題として、発達のみならず甘えの欲求への対応に関する「施設幼児の発達と支援の必要性」や、「施設・施設幼児の保護者との連携における課題」などがあり、施設幼児の保育における課題の多様性が示唆された。

施設幼児の入園した27園において、児童養護施設の幼児の保育において必要としている研修や連携等は、「児童養護施設と園との連携」が(19園, 73.1%)と最も多く、「虐待などによりトラウマを抱えている幼児に関する研修」が(7園, 26.9%)、「児童養護施設で暮らす幼児に関する研修」(6園, 23.1%)、「児童養護施設の幼児の保育における職員の加配」(4園, 15.4%)など

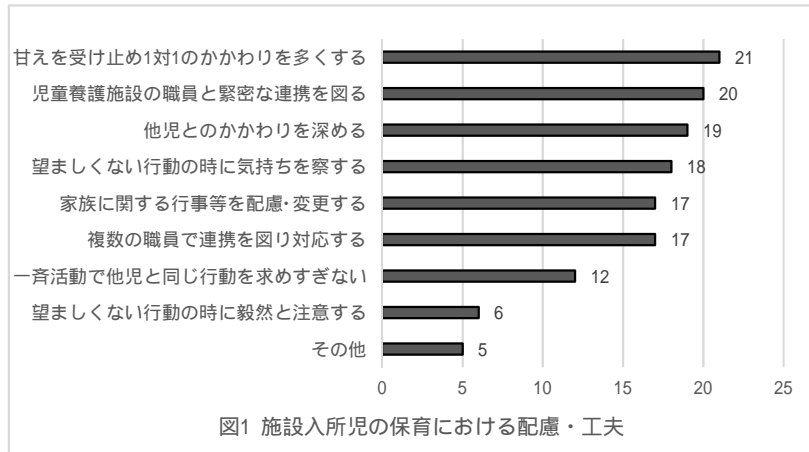


図1 施設入所児の保育における配慮・工夫

があった。この結果から、施設幼児の入園した園の保育者が最も必要としているのは児童養護施設との連携であるといえる。また、児童養護施設の幼児に対するトラウマなどに関するより専門的な研修や、職員との加配や専門機関との連携などの体制に対するニーズもあるといえる。

また、施設幼児が入園した幼稚園が保育において課題と感じていること(自由記述)は、大きく「施設幼児の発達と支援の必要性」(11回答, 36.7%)、「施設・施設幼児の保護者との連携における課題」(13回答, 43.3%)、「施設で生活していることへの配慮や課題」(6回答, 20%)であった。施設幼児の保育における課題の多様性が示唆された。

2) 施設入所児が入園していない園の回答: これまで施設幼児が入園していない園では、今後施設から入園希望があった場合には「入園を前向きに検討する」が54.4%、「入園を検討するが、受け入れが難しい場合にはお断りする」が38.8%であった。自由記述の回答から、入園が難しい場合の理由としては施設幼児の問題行動等を懸念する「施設幼児の発達と支援の必要性」(65回答, 21.6%)や、送迎や行事参加などに関する「施設幼児の保護者との連携における課題」(90回答, 29.9%)などが多く想定され、そのための職員配置や園の体制に関する課題が受け入れを難しいとする理由となっていた。

これまで施設幼児が入園していない園では、今後児童養護施設から入園希望があった場合に受け入れが難しい場合の理由としては、その内容は大きく10のカテゴリーに分類された。それらのうち主な内容は、「施設幼児の保護者との連携における課題」(90記述, 29.9%)、「施設幼児の発達と支援の必要性」(65記述, 21.6%)、「保育者の専門性や園の体制等」(63記述, 20.9%)、「入園のための検討」(24記述, 8.0%)、「定員や入園基準・制度等」(18記述, 6.0%)などであった。このことから、施設幼児の入園が難しいと考えられる主な理由には、心のケアなどの施設幼児に即した対応が園で可能かどうか、施設幼児が園の集団生活に適應できるかといったことや、保護者の協力や参加が必要な行事等で施設幼児の保護者代わりとなる施設職員との連携に関する難しさが多く想定されているといえる。

(2) 施設入所児・要支援家庭児に対する保育者の専門性向上のための試行的心理教育プログラム研修及び研修プログラム開発(研究2、3)

目的：子どもや親の困難さに応じるためのワークショップ型研修を実施しその効果を検証する。

方法：保育者を対象に、子どもや親の困難さへの対応を共通テーマとして図2の通り、第1・2回の研修を試行的に実施後、第3回研修を実施した。第1回研修：2017年12月。参加者46名。内容は子どもの性問題行動・性被害に対応する研修で、研究分担者野坂による『My Step』を用いた講義とワークショップを実施した。子どもの性の発達と性問題行動・性被害の支援について2時間の講義後、課題の共有と基本的な支援スキルについて2時間のワークショップを行った。第2回研修：2018年2月。参加者28名。内容は子どもと適切に関わる研修で、研究分担者福丸による『CARE』プログラムの柱になる概念を中心とした講義後、ロールプレイ等を体験する2時間のワークショップを実施した。

第3回研修：2018年10月。参加者32名。講義とワークショップを組み合わせた第1・2回研修のアンケート結果を踏まえ、表1に示す通り、心理教育を踏まえた講義(講師：野坂・福丸)を2時間実施後、休憩を挟んで、事例紹介とワークショップを2時間(講師：野坂・福丸・砂上・實川)、調査説明(實川)を30分間実施した。第3回研修の効果を検証するために、第3回研修直後(以下検証Iとする)と、第3回研修5か月経過後(以下検証IIとする)の2回に分けてアンケートを実施した。

検証Iでは、研修会場で31名(回収率97%)から回答を得た。また検証IIは第3回研修から5か月後の2019年3月に、事前に協力の意思が示されていた16名へアンケートを郵送し10名(回収率63%)から回答を得た。質問内容は、実践で「研修内容を意識することがあるか」、「職場での同僚との共有や研修の実施」、等である。

結果：検証I(第3回研修会場のアンケート結果)「研修を受講し、活用できそうな保育場面が思い浮かんだか」については「はい」(87%)、「いいえ」(13%)であった。活用できそうな保育場面(自由記述)については全46記述であった。46記述の内容のコーディングを行い、20コードを生成し、さらに複数コードに共通の内容を示す6カテゴリーを生成した(以下カテゴリーを【 】で示し、()は全記述数46に対する割合を示す)。記述数の最も多かった【保育者の関わり場面】では、子どもへの言葉掛けや子どもの行動へのまなざしに関する記述(28%)であり、子どもに対する具体的援助として活用できるとする意見が多かった。次いで多かった【子どもの姿】は、子どもの逸脱行動に関する記述(17%)が多く、保育者は実際の子どもの姿を想起しながら研修を受講していたことが示された。「『かかわりの難しい子どもや保護者』以外の場面でのどのように生かせると思うか(自由記述)」は26記述であり、「どの子にも、そして、どの保護者にもあてはまる」等の【普段での保育の活用】(77%)が最も多く、次いで「日々の保護者との関係作り」等の【保護者対応全般】(35%)、「複数担任間、全職員間でのコミュニケーション」等の【職員間での活用】(35%)であった。保育者は子どもや親の困難さに応じる時だけでなく、日常の保育場面での活用や保護者対応、職員間での関係作りにも生かしたいと考えていることが示された。

検証II：第3回研修5か月後のアンケート結果。研修5か月経過後の回答結果を示す。「研修内容を意識することがあるか」についての質問では、「とてもそう思う」(70%)、「そう思う」(20%)、「無記入」(10%)であった。「自分の実践の変化を感じるか」については、「ある」(90%)、「ない」(10%)であり、その内容(自由記述)については全13記述数から9コード、5カテゴリーが生成された。「その子の背景にあるものを探ろうとして関わるようにしている」等の【子どもの理解】(31%)、「子どもの行動を言葉にし、小さなことでもほめるようにした」等の【子どもの行動への注目】(23%)、「3つのPとKを意識した声かけやわかりやすく1つの指示を出すことを保育の中で心がけられるようになった」等の【言葉掛け】(23%)、【学び続けること】(8%)、【職員間での共有】(8%)である。これらの結果から保育者は、5か月経過後も、第3回研修内容を子どもへの言葉かけや関わり、気持ちや背景の理解等を通して実践しており、研修が有効であることが示された。

以上の検証I・IIより、保育者は子どもの気持ちの理解や言葉掛け等の保育場面、保護者への関わり、職場での同僚との共有や研修等に活用し、自分の実践の変化を実感していることが示された。研修内容・方法ともに保育者が継続的に実践できるものであり、本研修の有効性が示されたといえる。

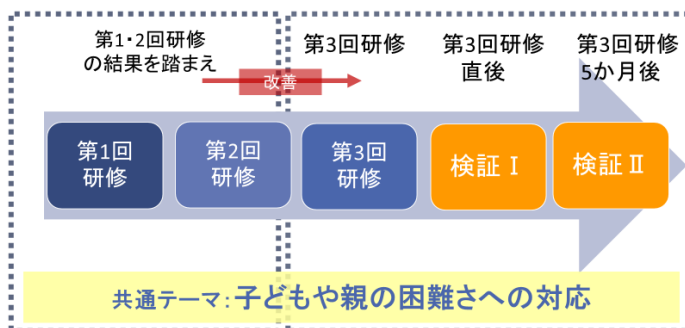


図2 研修及び調査方法

表1 第3回ワークショップ型研修の概要

講義 (2時間)	(1) 準備しよう！ 研修の趣旨と進め方
	(2) 知っておこう！ 大人と子どもの絆を深めるコミュニケーションのヒント 問題行動は子どものサイン！危機をチャンスに変える方法
事例紹介と グループ ワーク (2時間)	(3) みんなで考えてみよう！ 事例① なんでそんなことするの？子どもの行動の背景は… 事例② それって虐待？保護者にどう関わればいいのか… 事例③ 何が問題？保育者自身や職場のあり方を見直そう ふりかえりとまとめ
	調査説明 (30分間)
	(4) より良い保育のために 研修内容の保育現場での有用性調査の協力依頼・説明

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 砂上史子	4. 巻 48
2. 論文標題 保育の質のさらなる充実：「プロセスの質」の向上を目指して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 研究紀要（公益財団法人 日本教材文化研究財団）	6. 最初と最後の頁 70-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 近藤あゆみ・砂上史子	4. 巻 4
2. 論文標題 若手保育士の新人保育士への指導経験	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 保育教諭養成課程研究	6. 最初と最後の頁 23-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 實川慎子・高木夏奈子・栗原ひとみ・山田千愛・高野良子	4. 巻 11
2. 論文標題 保育現場の地域連携事業 千葉市内の保育所等の実態調査から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 植草学園大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 41-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 砂上史子	4. 巻 35
2. 論文標題 保育者を取り巻く現状とその支援～保育者の感情労働とバーンアウト～	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 家族心理学年報 『個と家族を支える心理臨床実践 支援者支援の理解と実践』	6. 最初と最後の頁 38-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤映見・砂上史子	4. 巻 66(2)
2. 論文標題 児童養護施設の幼児の幼稚園就園の実態	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 千葉大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 215-220
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 砂上史子	4. 巻 35
2. 論文標題 保育者を取り巻く現状とその支援～保育者の感情労働とバーンアウト～	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 家族心理学年報	6. 最初と最後の頁 38-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野坂祐子	4. 巻 61(10)
2. 論文標題 児童福祉におけるトラウマインフォームドケア	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 精神医学	6. 最初と最後の頁 1127-1133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野坂祐子	4. 巻 2020年1月号
2. 論文標題 子どもの性の安全・安心を守るために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 健康教室	6. 最初と最後の頁 96-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 砂上史子
2. 発表標題 指定討論：保育者の離職と再就職をめぐる論点（於：自主シンポジウム「保育者の離職および再就職における経験プロセス」）
3. 学会等名 日本保育学会第70回大会 川崎医療福祉大学（倉敷市）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 砂上史子
2. 発表標題 話題提供：児童養護施設から幼稚園等への入園の実態（「幼稚園・認定こども園への調査から」（於：自主シンポジウム「保育・幼児教育と社会的養護との連携：現状と展望」）
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会 大妻女子大学（東京都千代田区）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 實川慎子・砂上史子・福丸由佳
2. 発表標題 子どもや親の困難さに応じる心理教育に根差したワークショップ型研修の開発と検証
3. 学会等名 日本臨床発達心理士会第15回大会 九州産業大学(福岡市)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計13件

1. 著者名 砂上史子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 184（うち55-69）
3. 書名 第4章 子ども理解における保育者の姿勢とカウンセリングマインド（高嶋景子・砂上史子編『新しい保育講座 子ども理解と援助』	

1. 著者名 砂上史子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 184 (うち73-91)
3. 書名 第5章 保育における観察と記録の実際 (高嶋景子・砂上史子編『新しい保育講座 子ども理解と援助』)	

1. 著者名 實川慎子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央法規出版株式会社	5. 総ページ数 191 (うち101-114)
3. 書名 第9講 子育ての経験と親としての育ち (白川佳子・福丸由佳編『新・基本保育シリーズ第9巻 子ども家庭支援の心理学』)	

1. 著者名 野坂祐子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央法規出版株式会社	5. 総ページ数 191 (うち151-162)
3. 書名 第13講 特別な配慮を要する家庭 (白川佳子・福丸由佳編『新・基本保育シリーズ第9巻 子ども家庭支援の心理学』)	

1. 著者名 福丸由佳	4. 発行年 2019年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 520 (うち105-111)
3. 書名 乳幼児を育てる時期 (日本家族心理学会編『家族心理学ハンドブック』)	

1. 著者名 砂上史子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 中央法規	5. 総ページ数 153(うち7-17)
3. 書名 第1章 保育者を取り巻く現状とストレス(砂上史子編『保育現場の人間関係対処法』)	

1. 著者名 砂上史子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 中央法規	5. 総ページ数 153(うち19-27)
3. 書名 第2章 保育における感情労働(砂上史子編『保育現場の人間関係対処法』)	

1. 著者名 實川慎子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 中央法規	5. 総ページ数 153(うち81-127)
3. 書名 第4章 保護者との関係におけるストレスとその対処法(砂上史子編『保育現場の人間関係対処法』)	

1. 著者名 福丸由佳	4. 発行年 2017年
2. 出版社 中央法規	5. 総ページ数 153(うち129-149)
3. 書名 第5章 保育者のストレス対処法とキャリアデザイン(砂上史子編『保育現場の人間関係対処法』)	

1. 著者名 砂上史子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 256(うち41-64)
3. 書名 第3章 保育の内容(汐見稔幸・大豆生田啓友編『アクティベート保育学 保育原理』)	

1. 著者名 砂上史子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 全国社会福祉協議会	5. 総ページ数 296(うち1-6, 127-151)
3. 書名 序章 保育専門職と保育実践を学ぶ前に / 第 部 第3章 保育内容と指導法(『最新 保育士養成講座』統括編集委員会編『最新保育士養成講座第9巻 保育専門職と保育実践 保育実習 / 保育内容の理解と実践』)	

1. 著者名 實川慎子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 全国社会福祉協議会	5. 総ページ数 296(うち151-168)
3. 書名 第1章 第3節保育者の連携・協働 / 第4節保育者の専門性と子どもの活 (『最新 保育士養成講座』統括編集委員会編『最新保育士養成講座第9巻 保育専門職と保育実践 保育実習 / 保育内容の理解と実践』)	

1. 著者名 福丸由佳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 160(うち13-19)
3. 書名 傷ついた子どもの回復はどのようになされるか?(川島大輔・松本学・徳田)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

・公開シンポジウム 2017年11月5日 「社会的養護で育つ子どもを共に育む保育・幼児教育」 クロスウェーブ幕張（千葉市）第1部 基調講演「虐待を受けた子どもの理解と生活の中の支援」（増沢高）/第2部 シンポジウム「社会的養護と保育・幼児教育の連携に向けて」（司会：實川慎子，話題提供：砂上史子「幼稚園における児童養護施設の幼児に対する保育」，村松健司「児童養護施設で暮らす幼児の就園・就学の現状と課題」，野坂祐子「トラウマが子どもに与える影響とその支援」，指定討論：小木曾宏，増沢高）

・平成29年～31（令和元）年度科学研究費助成事業報告書『施設入所児・要支援家庭児に対する保育者の専門性向上のための研修プログラムの開発』 令和2年3月 研究代表者：砂上史子（千葉大学）

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	福丸 由佳 (FUKUMARU Yuka) (10334567)	白梅学園大学・子ども学部・教授（移行） (32808)	
研究分担者	野坂 祐子 (NOSAKA Sachiko) (20379324)	大阪大学・人間科学研究科・准教授 (14401)	
研究分担者	實川 慎子 (JISTUKAWA Noriko) (80619776)	植草学園大学・発達教育学部・准教授 (32527)	